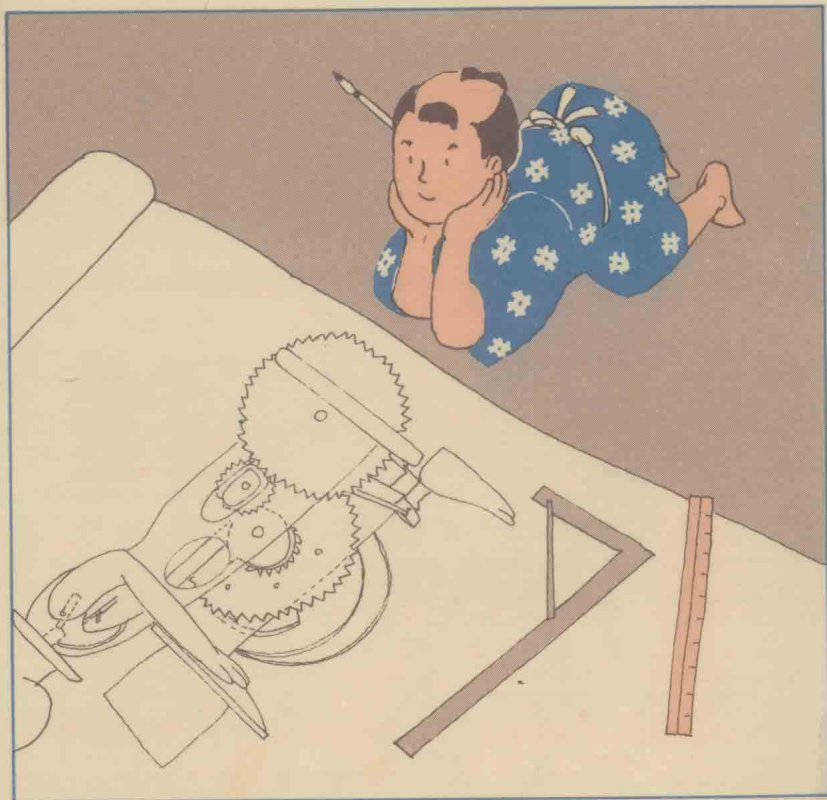


からくり儀右衛門^{ぎ え も ん}

大坪草二郎



葦真文社

〈著者紹介〉

大坪草二郎（おおつば そうじろう）

明治33年(1900)2月11日、福岡県朝倉郡上秋月（現甘木市）長谷に生まる。本名市助（竹下家女孀）、歌人・小説家。大正10年上京し「アララギ」に入り島木赤彦に師事、岡麓の薫陶を受く。大正12年三田南台寺寄寓中、同宿の石坂洋次郎と相知る。「二六新報」記者、「文壇」の編集に携わり、昭和5年4月文芸誌「つばさ」創刊、昭和12年7月歌誌「あさひこ」を起こし主宰する。昭和29年(1954)11月25日歿、54歳。作品に短歌をはじめ、小説、戯曲、童話、琵琶歌等多数に亘る。



〈検印省略〉

からくり儀右衛門

定価 1300 円

昭和55年7月25日初版第1刷印刷
昭和55年8月17日初版第1刷発行

著者

大坪草二郎

編集者

白根孝美

発行所

葦真文社

郵便番号 171

東京都豊島区長崎 4-46-14
電話東京 (03) 972-1795
振替口座 東京 1170574

本書の一部または全部を無断で複製複製（コピー）することは著作権者および出版社の権利の侵害になりますので、あらかじめ小社あて許諾をお求めください。

印刷製本・慶昌堂印刷株式会社

© Mitsuhiro Takeshita 1980

Printed in Japan

（落丁本・乱丁本はお取り替えします）

(0183) ISBN4-900057-07-X C8023 ¥1300E

からくり儀ぎ右衛門えもん
大坪草二郎著

葦真文社

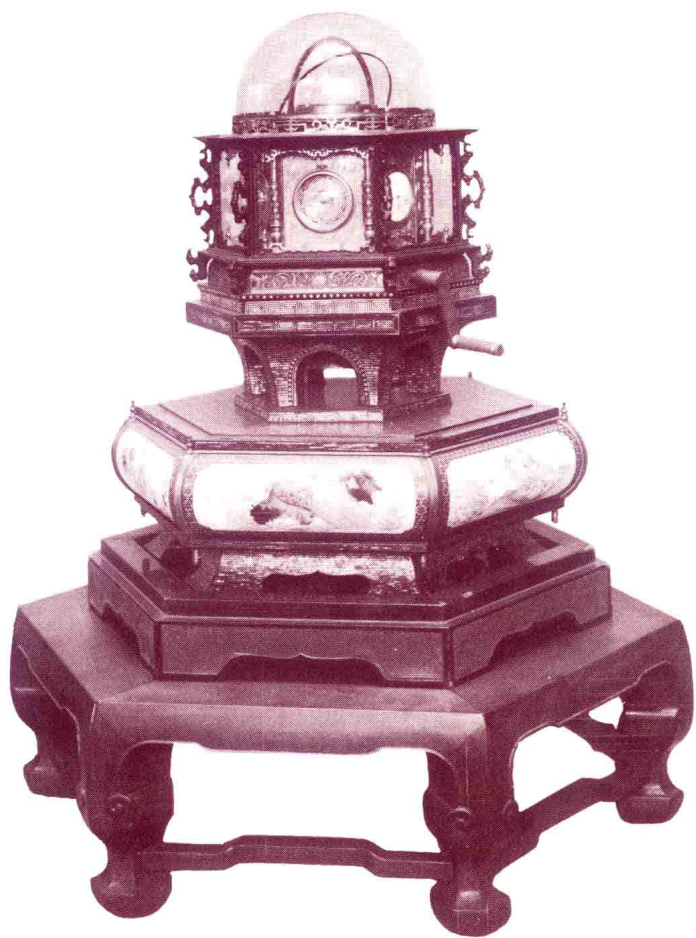
日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会



田中近江大椽源久重先生(写真提供＝東芝)



万年自鳴鐘(写真提供=東芝)

からくり儀^ぎ右衛門^{もん}

目次

- (一) つくり出すおもしろさ
(二) ふしぎなすずり箱
(三) 絵がすり
(四) ちえくらべのやくそく
(五) ちえはいつ出るか
(六) からくり人形
(七) 世の人のために

(八) 雲 流 水

(九) ねずみ燈と無尽燈

(十) 万年時計

(十一) 国をまもる発明

(十二) 日本さいしよの汽船

(十三) 故郷に錦をかざる

(十四) 発明に生きぬく

田中久重翁のこと

年譜

一〇六

一〇三

一〇〇

九七

九四

九一

八八

八五

八二

さし絵・水野行雄

(二) つくり出すおもしろさ

ここは九州久留米の通町で、鼈甲ざいくをする田中弥右衛門の家であります。

しゅじんの弥右衛門は、朝早くから、しごとばにすわりこんで、せつせと、さいくをしています。鼈甲は、小笠原や琉球(今の沖縄)などの、あついとところの海でとれる、たいまいという亀のこうらで、大きいのは長さ一メートルもあります。黄いろくすきとおった中に、黒いふちのいりまじった美しいそのこうらを、なべでにてやわらかくし、くし、こう

がい、めがねのふちなど、いろいろな物をこしらえるのです。

弥右衛門は、鼈甲ざいくのめいじんといわれるくらいで、ほうぼうからしごとをたのむ人が多く、たいそういそがしいのでした。

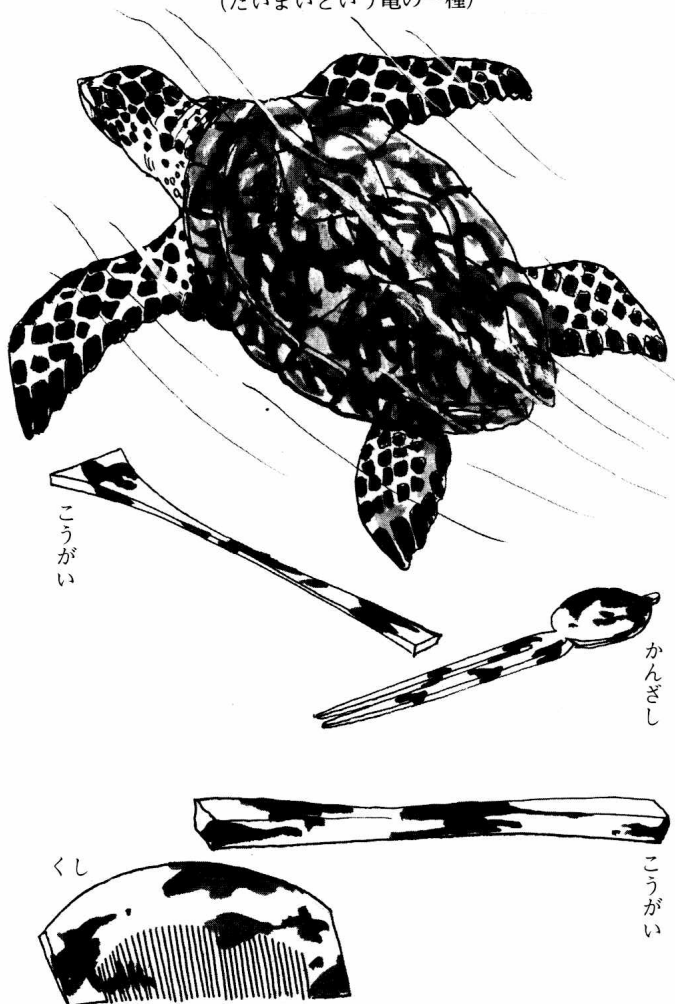
ところが、いまも一心にしごとをしている弥右衛門のそばに、一人の小さい男の子が、ちよこんとすわっています。丸い顔をすこし右にかたむけ、くりくりとした目をみはって、一生けんめいに、おとなのしごとを見ているようすは、なんだか、なまいきのようでもあり、かわいらしくもあります。

それは、弥右衛門のむすこの儀右衛門で、年は八つですが、毎日こうして、おとうさんのしごとを見ているのがだいすきでした。

「儀右衛門は、しごとばに来て、けっしていたずらをしないし、だまつて、おとなしく見ているばかりだから、すこしもじゃまにならない」

つくり出すおもしろさ

(たいまいという亀の一種)



そういつておとうさんは、儀右衛門がしごとばに来るのを、ゆるして
くださいました。おかあさんも、

「ほんとにこの子は、しごとがすきらしいですね。いまにきつと、じよ
うずな細工師になるでしょう」

といつて、喜んでおられました。

おとうさんが、たいまいのこうらを一枚いちまいはがし、やわらかく
にて、切ったり、けずったり、合わせたりしながら、いろいろな物をこ
しらえていくのが、儀右衛門には、おもしろくてたまりませんでした。
りっぱにみがきあげられて、つやつやと光っているくしや、かんざしを
見て、これが南の海におよいでいた亀かと思うと、なんだかふしぎな気
がするのです。

考えてみると、犬や、ねこや、牛や、馬が、たとえどんなにかしく

でも、じぶんでくふうして、物をこしらえるということはできません。物をつくり出す力は、神さまが人間だけにおさずけになったものです。だから人間は、毎日いろいろな物をこしらえ、なにかをつくり出すために、みんなはたらいしています。

儀右衛門は、外に遊びに行っても、いろいろな物をこしらえているところを見るのが、なによりもすきでした。

四五けんさきの路地には、かじやさんがあります。しゅじんは、小ぞうさんを相手に、毎朝早くから、とんでんかん、とんでんかんと、つちの音をひびかせ、火花をちらして、しごとをしています。

儀右衛門は、ときどきそこへ行つて、窓ごうしにぶらさがるようにして、のぞいて見るのでした。ふいごで火をおこすところから、鉄をまっかにやいて打ちのばし、だんだん、かまや、ほうちようなどの形にする

ようす、いよいよときあげて、ぴかぴか光る刃物になるまで、一心に見ています。そして、いろいろな刃物のこしらえかたを、いつのまにか、すっかりおぼえこんでしまいました。

表通りのかどには、大きな指物屋さんがあります。はっぴを着て、向こうはちまきをしめた、しょくにんたちが、茶だんすだの火ばちだの、いようじだの、いろいろなどうぐをこしらえているのです。

儀右衛門は、その指物屋さんにも、ときどきやって来ます。かなで板をけずるようす、のこぎりでひいたり、のみであなをあけたりして、いろいろな形にくみ立てていくありさま、そうしたしごとのじゅんじよや、やりかたなどを、またたきもせずに見ているのです。

からかさやさんが、かさをこしらえるところ。ぬりものやさんが、うるしをぬるところ。人形師が、お人形をこしらえるところ。そのほか、

つくり出すおもしろさ

